

Title	彙報 : 昭和四十五年一月より昭和四十五年十二月まで
Author(s)	
Citation	東方學報 (1971), 42: 347-352
Issue Date	1971-03-30
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/66466">https://doi.org/10.14989/66466</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

# 彙報

昭和四五年一月から  
昭和四五年一二月まで

## 研究状況

### 班研究

#### 東 方 部

##### 漢代文物の研究

班長 林 巳奈夫

本年度四月より開始した。研究の趣旨については『人文』第一號に記した通りである。研究班には所内より日比野丈夫・藤枝晃・吉田光邦・田中重雄・永田英正・橋本敬造、學内より樋口隆康諸氏の協力をえ、學外より相川佳子予（奈良女子大學）・秋山進午（大阪城天守閣）・古原宏伸（奈良大學）・小南一郎（京都大學研修員）・近藤喬一（古代學協會）・杉本憲司（大阪府立大學）・内藤戊申（愛知大學）・町田章（奈良國立文化財研究所）が参加している。研究会の資料として、まず『沂南古画像石墓發掘報告』を用いた。画像石の各幅についての解説を班長が読み、ついで班員がこれにつき討論し、關係の漢代文物について認識を深める、という方法によって研究を進めた。一月にこれを終了し、ついで『江蘇徐州漢画像石』を資料に、同様な方法で研究会を進めているが、この書物は画像の解説が粗略であるから、班員が分擔して解説のテキストを豫め作って配布している。研究会は隔週に行なわれ、毎回の討論の内容

は記録をとり、プリントして次回に配布している。なお、研究の工具として『文物參考資料』『文物』『考古通訊』『考古』『考古學報』等の總目錄、『新訂三禮圖』などをオフセット印刷にして配ったほか、研究会と並行して、藤井有隣館藏の漢代關係遺物の大部分の寫眞撮影を行ない、資料を蒐集した。

##### 隋唐の思想と社會

班長 福永 光司

五世紀から八世紀半ば―劉宋王朝の成立から安祿山の亂の勃發―に至る中國の社會において、佛教（佛典）が如何にして漢字文化の中に組み込まれ、中國民族の哲學的思考の中に取り入れられたか、また、それを可能にした中國の歴史的・社會的條件ないし基盤は、いかなるものであったかを総合的に考察する。

第一年度は、六朝佛教學の一つの集大成ともいふべき吉藏の『三論玄義』の會讀を中心として、その間に班員それぞれの専門的立場からする研究發表をまじえ、研究推進の全體的な基盤を確立する。

##### 白氏文集の校定

班長 平岡 武夫

『白氏文集』の校定は、那波本・馬元調本・汪立名本など、通行の本のほかに、貴重な資料をゆたかに集めることができた。前集後集の編集をしている金澤文庫本（大東急記念文庫および天理圖書館藏）その他と、前詩後文の編集をしている宋

紹興本（文學古籍刊行社影印）と、これら二つの系統の諸資料を綜合して、週に一回、共同研究を行ない、本文を校定し、注解を行なっている。今期は、制誥類（卷二一・二三・補遺）と吟・記（卷七〇）を取り上げた。

##### 敦煌寫本の研究

班長 藤枝 晃

今までの共同研究「中國古文學書の體系化」を四五年四月に改組して、標記の題目とした。敦煌寫本中の北朝期のもの、すなわちもともと初期のもの、とくに古逸書を向う四々年間に總點検することに目標をおく。北朝期の古逸書とは、ほとんどが佛典注釋書の類、隋唐以後に南朝系の學問が優越したために中國では滅びたものである。その系統づけによって北朝の學問の系譜復原の手がかりをつけることを期待する。

この作業をつづける傍ら、四五年秋に藤枝と古泉とは、歐洲各地の敦煌・トルファン寫本を調査して、この關係の寫本の寫眞をかなり持ち歸ることができた。

##### 朱子研究

班長 田中 謙二

朱子乃至朱子學を眞に正しく究明するには、まず資料の面において、主著のほかに、特殊な文體をもつ『朱子語類』一四〇卷の自在な驅使と、さらに研究者の側にも、哲學はもちろん、史學・文學・語學および科學史など各分野にわたる專家の協力が要請される。本共同研究は上記の二條件をほぼ満たしうる確信のもとに、本年度より新たに發足した。今期は『朱子語類』の文體に習熟するため、その會讀と討論に重點を置き、卷一理氣（上）および卷三鬼神の前半を讀したほか、つぎの報告が行なわれた。

朱子語類の成立過程

朱子の氣象學

天下郡國利病書の研究

三月まで日比野が班長として續けてきた「中國金石資料の研究」は、拓本の整理分類が一段落し、『金石萃編』の會讀も漢代までを終えたので、い

ちおううちきり、その後は拓本目録の整備と出版の用意につとめている。

「水經注疏訂補」を班研究の題目としていた森教授が三月をもって定年退官となったので、歴史地理方面の新課題として『天下郡國利病書』の研究をとりあげた。この書は明末清初の學者顧炎武の著述であるが、當時の行政區劃の順序に配列された、明代の社會經濟資料集といつてよい。從來これを全體的に研究對象としてあつたものはないので、今回はこの書にあらゆる方面から徹底的分析を加え、顧炎武の學問とともに明代の歴史地理、ないし社會經濟史の解明に寄與しようというのが目的である。三月以來すでに十八回の研究會を開き、班として採擇すべき問題點をつとめた。

辛亥革命の研究

班長 小野川秀美

辛亥革命は、中國近代史上、とりわけ舊民主主義革命期におけるきわめて重要かつ複雑な性格を有する歴史的事件であるが、われわれは、政治・社會・文化・思想等の諸側面よりこの革命の特質を分析解明したいと考えている。研究會は毎週土曜日午前中に開催し、この一年間は、まず班員の關心ある問題についての研究發表を行なってきたが、今後、班員相互の分擔する題目の調整に進むつもりである。

なお研究發表と併行して進めている基礎的な諸作業のうち、本年三月には『民報索引』上巻を刊行し、下巻刊行の準備を終え、また重要文獻の翻譯をいち早く進展させた。

科學者列傳の研究

中國における科學技術の展開過程を、科學者と技術者の傳記とおして考察することに本研究班の目的があり、さしあたり本格的なプロジェクト

研究のための問題と資料を調査する。そのために、中國歴代正史の科學者・技術者の列傳（方術・方伎・藝術傳を含む）および科學者・技術者の代表的な文章（たとえば、後漢張衡の「靈憲」）を會讀する。最初は、清王先謙の集解のある『後漢書』をとりあげる。また、班員の希望に應じて月一回程度の頻度で、班員その他の人びとによる報告を行なう。ただし、會讀は時代を追って行なうが、報告については時代・テーマを限定しない。

漢籍委員會

委員長 川勝 義雄

一九六九年七月に、漢籍整理の實習を兼ねた實務處理機關として、本委員會が發足して以來、毎週一回の委員會は順調に活動し、委員は本所の漢籍整理法に馴れるとともに、實務處理も進捗して、現在は文獻センターで撮影された漢籍の整理に、しだいに移りつつある。

類目委員會

委員長 市原 亨吉

東洋學文獻類目の編纂は、一九六五年（昭和四〇年）からは、本所附屬の東洋學文獻センターが中心となり、所内よりの協力を得て進められて来たが、一九七〇年四月より、新たに類目委員會が發足して編纂を擔當することとなり、所内よりの協力體制が一そう強化され、内容の充實が期待さ

れるに至った。現在の委員は九名で、毎週一回、定期的に會合して、編纂のための共同作業を實施している。

一九六九年度版の編纂をすでに完了し、その出版を準備中であり、ひき續き一九七〇年度版のための資料収集を行なっている。

日本部

大正・昭和初期の時代思潮と世論

班長 井上 清

昭和四十四年四月に發足したこの研究班は、前年までの「一九二〇年代の政治と社會」研究班の成果をふまえて、昭和四十一年からの特定研究「日本近代化の研究」の課題「大正・昭和初期の時代思潮と世論」のまとめを目標に、「東洋經濟新報」の論調の分析を中心として「大阪朝日新聞」その他を参照しつつ、蒐集された諸資料を活用して、この時期の世論の形成、操作、時代思潮の變遷、等を總合的に究明している。

社會運動の研究

班長 渡部 徹

第一期として明治期から一九二八―二九年の社會運動の實態と、その思想の究明を當面の對象としているが、この時期は歐米の運動と思想の影響を強くうけているので、歐米のそれを常に念頭におき、對比しつつ、日本でどのうけとめ方とその影響を精密に検討している。したがって討論は日本を中心としつつもコミンテルンや各國の實態の検討を意識的に組み合わせるスタイルをとっている。

家族問題の研究

班長 太田 武男

この研究は、夫婦・親子・相續などをめぐる諸問題に關する理論的・實證的研究を、その主たる

目的ないし内容とする。従来、この方面の研究は、それぞれの専門分野において個別的に行なわれていたが、今回の研究は、法律學的な觀點からの考察を中心としつつも、それに社會人類學的な觀點からの考察をも加えて、總合的に行なわんとする點において特徴的である。昭和四十一年四月より毎週一回研究会を開いて、主として夫婦問題、なかでもとくに「離婚問題」について研究をつづけてきた。四五年八月有斐閣より刊行した「現代の離婚問題」は、その研究報告であるが、その間、われわれは、資料の蒐集・整理や調査をも行なってきた。相前後して刊行した「家族法文獻集成」・「家族問題文獻」・「現代女性の結婚觀」（いずれも人文研刊）は、その成果である。

そして、昭和四十四年四月からは、第二期に入り、今回は主として親子問題を中心に研究を進め、とりあえず、各専門分野からの親子観ないし親子關係の本質、養子制度などについての検討を行なってきたが、本年度文部省特定研究「産業構造の變革にともなう諸問題」が設定されたので、この研究班は、家族關係の變遷をテーマに参加することになり、夏休暇を利用して、京都府北桑田郡舊鶴ヶ岡村（現美山町）において同村民の家族生活の實態を調査した。近く刊行豫定の太田・井上編「山村における家族の生活」（人文研調査報告二七號）は、その成果の報告である。

### 社會科学における電子計算機の利用法

班長 三宅 一郎

社會科学と人文科学における電子計算機の利用法を開発するのがこの研究班の目的であるが、たんにその利用技術だけではなく、その前提となる

情報處理、數學モデルをはじめ、コンピュータ社會論、文化論まで廣く討議している。また、大阪市大の生澤雅夫氏、京大電氣教室の杉田繁治氏、京都産業大學の小平修氏、後藤眞志氏など研究班外の専門家を積極的に招いて報告をしてもらった。討議に参加していただいている。

### 西洋部

#### 十九世紀フランス社會思想の研究

班長 河野 健二

十九世紀フランスの社會思想のうちで、ブルードンを主要な研究対象としている。これまで、ブルードンの社會思想の特質をなすと考えられる論點、當時の社會・經濟狀況とのかわり、マルクスをはじめとする社會主義思想との關係、二月革命における役割、社會主義と文學の問題等を検討してきた。研究の一層の深化と綜括が今後の課題である。

#### 異端運動の研究

班長 會田 雄次

中近世における異端運動について、西歐・ビザンツ・中國・日本について個々の事例の概略の報告をうけ、これを素材にして比較研究の方法論を討議している。ことに異端思想と社會運動との結合のあり方を多面的に把握することに重點を置いており、今後さらに具體的事實の究明を通してこのことを深めたい。

#### 文明の比較社會人類学的研究

班長 梅棹 忠夫

従来、未開社會の研究に主力をむけられていた社會人類学的研究方法をもちいて、世界の諸文明の比較研究を行なおうという目的である。地理學、

言語學、歴史學、生態學などの専門家もまじえて、廣い視野からの研究報告がなされている。

#### アフリカ社會の研究

班長 梅棹 忠夫

本班は京都大學關係のアフリカにおける人類學調査の経験者を中心として構成されている。現地調査の結果を理論化する作業が續られている。

その成果の一部は *Kyoto University African Studies* として毎年一冊出版されているが、本年は近く vol. VI が發行される豫定である。

#### 理論人類學の研究

班長 梅棹 忠夫

人類學研究における理論的側面および方法論的開拓をめざす研究班である。とくに精神人類學および人類學におけるモデル形成の試みなどがなされている。十二月からは、親族組織の數學的研究の分野における第一人者である劉斌雄氏をむかえた。

#### 現代における知識の意味

班長 藤岡 喜愛

この研究班は、四四年度において、助手會での討議をも含めて「共同研究」の一般的性質を検討してきた。四五年度に入って、研究を進める上で具體的素材として『柳田國男集』をとりあげた。柳田學に含まれる「知識」と、その現代における意味を検討してきた。後半においては、漸次、方法的諸問題が大きく關係して、柳田學以外の分野との關連性がとりあげられつつある。

### 個人研究

#### 東 方 部

中唐における讀書人生活

孫文の研究

平岡 武夫  
小野川秀美

中國古文書學	藤枝 晃	ルソーの政治思想について	樋口 謹一	七月八日	林「殷中期に由來する鬼神」	日比野丈夫
中國運河史の研究	日比野丈夫	宗教改革期ドイツの思想と社會	中村賢二郎		「殷中期に由來する鬼神」	
中國における文學と美術の交流	田中 謙二	逆ユートピア小説の比較研究	多田道太郎		平岡「白居易と寒食・清明」	狭間 直樹
民國初期思想史	島田 虔次	西洋論理思想史	山下 正男		小野「顔元の學問論」田中 謙二	
魏晉老莊思想研究	福永 光司	パーソナリティーの進化	藤岡 喜愛	七月十五日	船越「『坤輿萬國全圖』と鎖國日本」	寛 文生
六朝貴族社會の研究	川勝 義雄	文學の言語論的研究	竹内 成明		牧田「六朝士人の觀音信仰」	衣川 强
殷周文物の考古學的研究	林 巴奈夫	マルクス歴史理論の形成	阪上 孝		磯波「唐の律令體制と宇文融の括戸」	山田 慶兒
唐代名人傳記資料の収集と年譜の作成	市原 亨吉	物質文化の社會人類學的研究	石毛 直道	九月三〇日	今井「全五代詩について」	永田 英正
疑偽經典の研究	牧田 諦亮	日本部	井上 清		梅原「宋代の戸等制をめぐって」	小野川秀美
宋代開封の研究	梅原 郁	日本帝國主義の研究	渡部 徹		日比野「史記貨殖列傳と漢代の地理區」	橋本 敬造
中國の詩學	荒井 健	日本勞働運動史	林屋辰三郎		狹間「辛亥革命時期の湖北における革命と反革命」平岡 武夫	市原「蜀刻唐六十家集攷」
宋代の科學と技術	山田 慶兒	變革期における歴史と文化	太田 武男			
白居易の住居	今井 清	家族法の研究	飯沼 二郎	一〇月七日		
明清思想史	小野 和子	横井時敬の研究	吉田 光邦			
中國古代官僚制の研究	永田 英正	日本技術史の研究	松尾 尊兎			
在華イエズス會士作成地圖とその影響	船越 昭生	大正政治史の研究	飛鳥井雅道	一〇月一四日		
唐中期の政治と社會	磯波 護	日本近代文化の研究	三宅 一郎			
中國現代文學史の諸問題	寛 文生	政治意識と政治行動	山本 有造			
インド佛教思想史―攝大乘論に至るまで―	荒牧 典俊	日本資本輸入史研究				
宋代の官僚社會	衣川 强	東洋部研究會				
明清における天文學・曆學・數學	橋本 敬造	前期は、昨年にひきつづき、毎週水曜日、二、三時間を費し、主として共同研究ないし研究所のあり方(特に東洋部に重點をおいて)について、				
圖書分類法の研究	中西 恵子	延べ十五回にわたって討論を重ねた。後期は「東方學報」第四十一冊創立四十周年記念論集の合評會に重點を移し、全二十四篇のうち二十三篇の論文の合評を行なった。				
西洋部	河野 健二	六月二十四日 福永「大人賦」の思想的系譜				
世界資本主義の構造	會田 雄次	(批評者)小野 和子				
ヨーロッパの一五・一六世紀の社會思想	上山 春平	七月一日 藤枝「樓閣文書札記」林 巴奈夫				
社會科學方法論	梅棹 忠夫	衣川「宋代の俸給について」				
文化分析の基礎的研究						

十一月八日 永田「漢代の選舉と官僚階級」

市原 亨吉

小野川「光復會の成立」

荒牧 典俊

十一月二五日 寬「中國現代文學史」と三〇

年代文藝の評價」 福永 光司

福島「讀論語說」 今井 清

また夏期には「禮記注疏」曲禮篇の會讀を六回にわたって行なつた。

七月二二日 (擔當) 藤枝 晃

七月二九日 小野川秀美・市原亨吉

八月二日 平岡 武夫

八月一九日 寬 文生・磯波 護

八月二六日 今井 清・島田 虔次

九月二日 田中 謙二

### 事業概況

停年退官記念講演會 於 分館

三月一七日

日本近代化の出發と展開

三月一八日

中國文化受容の一面 — 令集解と玉篇 —

第二次ヨーロッパ學術調査所内報告會

二月三日

挨拶

總括説明

フランス班

イタリア班

ユーゴー班

坂田 吉雄

森 鹿三

於 本館會議室

會田 雄次

梅棹 忠夫

樋口 謹一

谷 泰

米田 治泰

人文科學夏期講座

比較文化

八月一日 官僚文化

中國文化の特質

二日 シュメールとミケーネ

數奇と戀愛

三日 形と色

近世文化の黎明

開所記念公開講演會

十一月四日

政黨支持における流動性と安定性

十六世紀ヨーロッパの異端運動

無用の用

於 本館廣間

磯波 護

山田 慶兒

前川 和也

多田道太郎

吉田 光邦

林屋辰三郎

於 分館會議室

三宅 一郎

中村賢二郎

福永 光司

### 所員動靜

○牧田諦亮講師(東方部)は助教に昇任(三月一日付)。

○福島吉彦助手(東方部)は山口大學文理學部助教に出向(三月三十一日付)。

○坂田吉雄、森鹿三兩教授は停年退官(三月三十一日付)。なお、坂田教授は産業大學教授に、森教授は佛教大學教授に就任。

○西村源次事務長は文學部事務長に配置換え、後任として、位ノ花事務長(經濟研究所)が就任(四月一日付)。

○所長森鹿三教授は三月三十一日任期満了、河野健二教授が新所長に就任、附屬東洋學文獻センター長に併任(四月一日付)。

○松尾尊光講師(日本部)、飛鳥井雅道助手(日本部)はともに助教に昇任。

○山田慶兒氏(同志社大學工學部)を助教(東方部)に採用。

○林屋辰三郎氏を教授(日本部)に採用(以上五月一日付)。

○福永光司助教(東方部)は教授に昇任(六月一六日付)。

○井口和起助手(日本部)は大阪外國語大學(講師)へ轉出(七月一日付)。

○荒井健氏(橘女子大學助教)を助教(東方部)に採用(八月一日付)。

○愛宕元氏を助手(附屬東洋學文獻センター)に採用(八月一六日付)。

○副島圓照氏を助手(日本部)に採用(二月一日付)。

○牧田諦亮助教は四月二日伊丹發、香港佛教連合會における世界佛教大會に参加、さらにソウル東國大學校その他において、中國佛教研究資料の蒐集と韓國佛教遺跡の調査を終え、五月三日歸學。

○内井惣七助手は四三年九月三日よりミシガン大學において哲學・倫理學等の研究を行なつていたが、四五年六月二六日いったん歸國、八月二五日ふたたび出國、同大學において科學哲學および記號論理學の研究に従事中(四六年七月末歸國の豫定)。

○山下正男助教は八月七日羽田發、ハーバード大學・ミュンヘン大學・ギリシャ古典學研究所等において西洋論理學史關係資料の調査研究に従事中(四六年七月末歸國の豫定)。

○田中重雄助手は第二次中央アジア學術調査隊員として、七月二日大阪港を出發、サマルカン

ド・カール・ベンジャール・カラチ近郊等において、クシャーン朝文化を中心とする中央アジアの考古學調査に従事中（四六年一月初め歸學の豫定）。

○藤枝 晃教授は八月二日羽田發、ソ連經由、ストックホルム民族學博物館における第二回國際シナ學會に出席、さらにコペンハーゲン大學・ドイツ科學アカデミー古代史考古學中央研究所・大英博物館・ケンブリッジ大學等において、中央アジア考古學・古文書學に關する研究調査ならびに研究交流を終え、一二月二七日歸學した。

○飯沼二郎助教授は一二月七日伊丹發、オーストラリアキャンベラ近郊において農業調査および資料蒐集に従事。さらに四六年一月六日より一週間オーストラリア大學における第二八回國際東洋學者會議に出席して、同月末歸國の豫定。  
○文學博士 那波利貞名譽教授（舊東方文化學院京都研究所商議員）は一〇月二〇日逝去せられた。

○本學研修員規程により、本所において研修する外國人研修員とその題目は次のとおりである。  
遼 耀 東 （國立臺灣大學講師）

東 洋 史 指導教官 平岡 教授  
期間 四五年二月～四六年一月  
Lijiana Glunac （國費留學生）

社會人類學 指導教官 梅棹 教授  
期間 四五年四月～四六年三月  
劉 斌 雄 （中國科學院民族學研究所研究員）

日本の親戚構成 指導教官 梅棹 教授  
期間 四五年八月～四六年七月

John S. Major  
中國知識歷史 指導教官 日比野教授  
期間 四五年七月～同年十二月  
阮 芝 生

司馬遷の歴史學 指導教官 平岡 教授  
期間 四五年九月～同年八月  
Donald Rodon  
日本歴史 指導教官 渡部 教授

期間 四五年一月～四六年一〇月

### 出版物

#### 紀要

東方學報 第四一冊（紀要第五五冊）  
三月三〇日刊。  
人文學報 第二九號（紀要第五二冊）  
二月二八日刊。  
人文學報 第三〇號（紀要第五三冊）  
三月二〇日刊。  
調查報告

第二十五號 ロールシャハ・テストによるパーソナリティーの調査(VI)―フランスサンリエ村の場合―  
藤岡喜愛編 二月二八日刊。

第二十六號 トレギエでの對話 ―京都大學ヨールツバ學術調査報告―  
桑原武夫編 一〇月三一日刊。

歐文紀要 ZINBUN 第一〇號 三月二〇日刊。  
研究報告その他

東洋學文獻類目 一九六八 川勝・市原・福島・衣川・中西編 三月三一日刊。

明清時代の科學技術史 藪内清・吉田光邦共編  
三月三〇日刊  
民報索引 (上) 小野川秀美編  
三月三一日刊

家族問題文獻集成 太田武男編  
三月五日刊  
世界資本主義の歴史構造 河野健二・飯沼二郎共編  
一月三〇日刊 (岩波書店)

ルソー論集 桑原武夫編  
八月二九日刊 (岩波書店)  
現代の離婚問題 太田武男編  
八月二〇日刊 (有斐閣)

CHAQALAQ TEPE (京都大學イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査報告) 水野清 一編 一九七〇年刊  
KYOTO UNIVERSITY AFRICAN STUDIES Vol. 5 (京都大學アフリカ類人猿學術調査報告) 水野清 一編 一九七〇年刊